編集余録

大江病院50年

医療法人社団博仁会（大江徹理事長）が運営する帯広の大江病院が昨年11月、開院50年を迎えた。精神病患者が地域で暮らせるように支える「十勝モデル」の原点となった病院だ▼50周年記念誌には初代理事長の大江覺（さとる）氏（故人）の足跡が詳述されている。大江氏は桧山管内旧瀬棚町生まれ。札幌医大卒、同大医局などを経て1966年、帯広協会病院精神科医長として赴任。69年に道内初の児童病棟を持つ大江病院を開業した▼大江氏は障害児と健常児を一緒に育てる保育所などを設立する一方、退院患者が地域で暮らせるように共同住宅「朋友荘」を開設し、十勝の各病院の精神科ソーシャルワーカーに運営を任せた。施設は地域の公的資源として誰でも使える「オープンシステム」で、これが後に十勝モデルとして高く評価された▼「患者の社会参加を手助けするスタッフを作る」という考えの下、十勝の医療・福祉で活躍する多くの優秀な人材も育てた▼病院敷地内に体育館がある。大江氏の長男・徹氏（精神科医）が小学生の時に「患者さんが冬に運動できないのはかわいそう」と書いた作文を覺氏が読み、75年に建てた。ここでは今も精神病患者のフットサルチームが活動、管内各地から選手らが集まる▼病院ではなく地域で普通に暮らせる共生社会を。人を大事にする先駆者の行動力に学びたい。（横田光俊）

2020・1・23